# 「先天性食道閉鎖症術後食道吻合部狭窄への自己由来口腔粘膜上皮細胞シート移植の臨床研究」に関する説明文書（再移植時補足文書）

（１）初回の移植状況ならびにその後の経過

今回、口腔粘膜から採取した細胞を利用して作成した食道シートを食道狭窄部のバルーン拡張裂創部に３枚移植いたしました。

シート移植後も食事が詰まって拡張が必要でしたが移植後６週後頃から次第に詰まりの程度が軽くなり、また詰まってもすぐに吐き出せる状態が約 12 週間持続しました。

しかし、移植後５か月頃より、再度詰まる頻度がまして次第に移植前と同様に２週間毎に拡張が必要な状態に戻りました。

（２）今後の治療方法

今後の治療としましては、バルーンによる狭窄部拡張の継続、ステロイド静脈内投与療法、狭窄部切除縫合法、食道ステント留置療法、または食道シートの再移植療法などが挙げられます。

（３）食道シート再移植をした場合のメリット・デメリット

食道シートを再移植することにより食道狭窄が抑制され、食事の詰まりが少なくなり、バルーン拡張の間隔が延長していく可能性があります。しかしながら、食道シートの再移植を行っても初回と同様に詰まる感覚が改善し、バルーン拡張間隔が延長する保証はありません。尚、再移植に伴う不利益、危険性は初回の移植時とほぼ同じで口腔粘膜採取及び採血に関する痛み、出血、気分不良などがありますが適切に対処いたします。

以上のことをよく、ご理解いただき、ご希望があれば食道シートの再移植を行うことは可能です。